

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00248

研究課題名（和文）ミュージアムにおける聴覚体験デザインの実践的方法論の研究

研究課題名（英文）Research on Practical Methodologies for Designing Auditory Experiences in Museums

研究代表者

寺田 鮎美（Terada, Ayumi）

東京大学・総合研究博物館・特任准教授

研究者番号：50466869

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「ミュージアムと音」の問題を取り上げ、来館者の聴覚を通じた新たなミュージアム体験をデザインする実践的方法論の構築を目的とした。特に、博物館がこれまで一般的に有していた、視覚を優位に取り扱うこれまでの価値観との比較において、聴覚がミュージアムでの鑑賞態度でいかに排除されてきたのか、なぜ音は副次的な活用が主とされてきたのかについて、文献調査に基づく考察を行った。また、各種メディアを用いた展示における音の活用、およびさまざまな展示解説音声の提供について事例調査を行い、ミュージアムにおける新たな聴覚体験デザインの可能性を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究に取り組んだ期間は、コロナ禍中あるいはアフターコロナにおいて、来館者が安全に過ごしながら、ミュージアムが人々の教育的・文化的享受を担保することに社会的な関心が集まった。展示物への接触禁止や会話禁止等、ミュージアムで人々に求められてきた鑑賞態度は、これまでのマナーの問題から感染症対策として厳格なルールともなった。このようななかで、ミュージアムにおける聴覚の活用には、感染症対策や安全なミュージアム環境づくりを行いながら、いかに人々のミュージアム体験を充実させるかに応える研究テーマとなった。

研究成果の概要（英文）：This study addressed the issue of "museums and sound" and aimed to develop a practical methodology for designing new museum experiences through the auditory sense of visitors. Based on a literature review, I examined how auditory perception has been historically excluded from the museum viewing experience and why sound has been used mainly as a supplementary element. This is contrasted with the conventional value system in museums, which predominantly treats visual perception as primary. Additionally, I conducted case studies on the use of sound in exhibitions through various media and the provision of different types of audio commentary for exhibitions. From these case studies, I considered the possibility of designing new auditory experiences in museums.

研究分野：博物館学、文化政策研究、芸術学

キーワード：ミュージアム 博物館 文化政策 聴覚体験 サウンドスケープ マルチセンサリー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1．研究開始当初の背景

近代的な「ミュージアム」（注：博物館・美術館の種別を問わない総称として用いる）の誕生は、王侯貴族等が形成した私的コレクションを公衆に公開したことに溯る。ミュージアムの歴史に関する研究では、コレクションを見せる／見るための公共的・恒常的な場としてのミュージアムの機能の重要性がしばしば強調されてきた。一方、近年では、音楽やメディア芸術を扱うミュージアムの登場が示すように、ミュージアムの扱う対象が従来の「サイレントオブジェクト」に留まらず、多様化の傾向にある。このように、歴史的に長らく視覚体験の優位性を特徴としていたミュージアムを取り巻く状況に変化がみられる現在、ミュージアムと音との関係性を捉え直すべき時期に差し掛かっていると言える。

2．研究の目的

本研究では、1）従来のミュージアムにおいて、いかに音が取り扱われて（排除されて）いたか、2）ミュージアムにおける聴覚体験を拡充・深化させるために必要な要素や環境は何かを問い、来館者の聴覚を通じた新たなミュージアム体験をデザインする実践的方法論を探究し、ミュージアムという場の創造性を高める芸術・文化実践モデルを提案することを目的とした。

3．研究の方法

本研究の主たる方法は、以下の二つとした。一つは、聴覚という角度からミュージアムの歴史を改めて読み解くための文献調査、もう一つは、音を用いた展示に関する事例調査である。これらの調査結果に基づき、本研究の目的とした、ミュージアムにおける聴覚体験をデザインする実践的方法論の探究、およびミュージアムという場の創造性を高める芸術・文化実践モデルの提案に取り組んだ。

4．研究成果

(1) 聴覚と視覚の対比、聴覚と触覚の対比

聴覚はミュージアムで長らく支配的であった視覚の優位性との強い関係の下にあった。多くのミュージアムで推奨されている鑑賞マナーでは、音は視覚的な鑑賞への集中を妨げる邪魔なものとして意図的に排除されてきた。また、ミュージアムで一般的にみられる音の活用例には音声ガイドがあるが、これも視覚との関係においては下位に置かれ、補助的な役割を担うに留まってきた。

一方、これまで多くのミュージアムでは、視覚以外の感覚では、ハンズオンという触覚による展示手法が活用されてきた。しかし、コロナ禍にあっては、ハンズオンは感染症拡大防止の観点から用いることができない、あるいは運用上の困難を生じさせる状況を経験し、非接触で、ソーシャルディスタンスを確保した状態で活用できる聴覚の可能性が改めて着目された。

(2) 音を活用した展示事例：展示解説音声提供

近年では、さまざまな技術の発達により、展示解説音声を提供するメディアに多様性が見られ、かつてのように、ミュージアムにおける視覚的な鑑賞の補助的な役割を担うにとどまらないケースが出現している。兵庫県立人と自然の博物館、広島平和記念資料館、ヴァンジ彫刻庭園美術館等における展示解説音声提供に関する現地調査からは、貸出音声ガイド、スマートフォンで使う専用アプリやYouTubeリンクなど、展示解説音声提供の多様な形態があることが把握された。

また、音によるAR（拡張現実）という概念や技術をミュージアムに取り込むことでミュージアムにいかなる新たな聴覚体験を生み出さうかの実践研究に取り組んだ。具体的には、「耳で聞く展覧会」をコンセプトに、研究代表者が展示企画を担当した特別展示において、その展示の構想や楽しみ方を伝えるための音声コンテンツを作成し、スマートフォンのアプリを通じて来館者に提供し、展示会場で視覚的に捉えられる体験に追加するかたちで、聴覚から獲得する情報によるAR体験の創出を試みた。

(3) 音を活用した展示事例：さまざまなメディアの利用

2021年秋に一部のギャラリーを新たにオープンした、帝国戦争博物館（英国）のほか、福岡市美術館、山口情報芸術センター、静岡県立美術館、京都国立近代美術館、エクスポラトリウ

ム（米国）、サンフランシスコ近代美術館（米国）にて、音を用いた展示の事例調査を行った。その結果、再現模型展示に組み込まれた音（効果音）、映像コンテンツに用いられた音など、最新の展示メディアにおける音の活用の工夫や、サウンドスケープなど、音そのものを主たる展示コンテンツとして、来館者の聴覚にはたらきかけるさまざまな工夫が捉えられた。特に、山口情報芸術センターやエクスポラトリウムでは、メディアアーティストとキュレーターの協働により、アートとテクノロジーを架橋し、必ずしもアート作品ではないミュージアム展示コンテンツが制作されており、考察の結果、このような協働がミュージアムにおける聴覚体験デザインの重要な要素の一つとして導き出された。また、音を用いた展示は、視覚障害者のアクセシビリティを高める効果があるとともに、それ以外の人々にも、聴覚を通じて得られる情報や感覚により、新たなミュージアム体験をもたらしていると考えられた。

（4）今後の課題

本研究では、ミュージアムにおける聴覚体験の可能性に着目してきたが、事例調査を進める中で、特にデジタルメディア等の展示技術を用いて、複数の感性を刺激する工夫を行っている注目すべき事例があることがわかった。それについては、本研究を発展させ、ミュージアムにおけるマルチセンサリー体験デザインの研究というテーマとして、今後、考察・分析の対象としていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 寺田 鮎美	4. 巻 25
2. 論文標題 ミュージアムと音：聴覚によるミュージアム体験の新たな可能性に関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Ayumi TERADA
2. 発表標題 Gender issues in university collections and museum exhibitions: a case of "The Faces of German Medicine" exhibition in Japan
3. 学会等名 University Museum and Collections (UMAC) Conference 2023
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------